



おばあちゃんと  
ソラの話

世界はすべてが焼き尽くされ灰色をしていた。赤や黄色やオレンジに満ちていた世界が、一瞬にして白と黒のモノトーンに染め上げられたかのように色彩を失っていった。太陽の光は分厚い雨雲に覆われ、黒い雨が降り注いでくる。早瀬咲の世界が滅びようとしていた。

「本当にすまない。僕には妻と大切な娘がいる。だから君と別れたい」

須藤明が視線を下ろした。彼の言葉は反射することなく、空々しく地面に吸い込まれた。咲の手からバンブーバックが落ち、中の弁当箱が散乱した。きれいに巻いた玉子焼きは崩れ、カラッとした唐揚げには砂が付着し、ナポリタンが汚らしく覆いかぶさった。

「ご、ごめんなさい。せっかく作ってきたのにこぼしちゃった。こぼれてないのもあるから、あそこのベンチで食べよう」

咲は弁当箱のふたを閉め、こぼれた料理をバックに入れ始めた。しかしナポリタンを入れようとしたところで、ケチャップ色の右手を止めた。

おそろおそろ明を見上げると、彼は悲しげな表情で咲を見つめていた。

「そうだね。いただくかな」

咲は自分の手がなぜオレンジ色になっているのか不思議だった。何が起きたか、よく理解できていない。

「明、何て？」

「だから、お弁当食べようって」

「そうじゃない」

咲はかぶりを振った。トマトソースにまみれた右手には不快感が残ったままだ。

「別れる？」

明は咲の視線を外して空を見上げた。空は何もなかったかのようにいつもの青で染められていたが、咲は雨が降りそうな空だと思った。しかしいつまで経っても雨は降らなかった。咲の視界だけが実世界とはズレが生じ、仄暗い空を捉えていた。

「そう、別れたい。君には本当にすまないと思ってる」

今度は理解できた。咲はそのまま膝をついてへたり込んだ。白いワンピースの裾がトマトソースで塗られたが、咲の目には映らなかった。咲の目からは大粒の涙が流れ落ち、視界がぼやけ始めていた。

「ひどいよ・・・」

そう呟いてうなだれた咲の肩に明が手をやろうとしたが、彼女は手を払いのけた。明の右手もオレンジ色に染まった。明は顔をしかめ、チノパンのポケットからハンカチを出すと右手を拭いた。

「ひどい・・・」

「すまない」

咲の手にハンカチを持たせ、明は彼女に背中を見せて歩き出した。咲は小さくなっていく明の

後ろ姿を、合わない焦点でぼんやりと見送ることしなできなかった。

どのくらいそこにいたのだろう。ようやく視覚が戻りはじめた咲は異変に気づいた。世界は暗く沈み込んでいた。夜の闇ではなかった。まわりの色あるものが、すべて灰色に染まっていた。灰色の強弱だけで世界は形成されていた。

## 世界は灰色になった

---

咲は昼過ぎに目を覚ますと、テーブルの上にあった昨夜の残りのコーヒーをひとくち飲んだ。冷めたコーヒーには味がなく、乾燥した喉を少しだけ潤しただけだった。コーヒーカップの横に無造作に置かれたマルポロライトを口にくわえ、100円ライターで火をつけた。

咲はタバコの煙が好きだった。煙は元の色そのまま見えるからだ。白い煙が天井にゆらゆらと上り、灰色の中に吸い込まれていった。白い煙はいったいどこに消えてしまうのだろう。咲はタバコの煙を見るたびに不思議に思った。

タバコなんて吸わなかった咲がタバコを吸い始めたのは、部屋に閉じこもるようになってからだ。明から別れの言葉を聞いたあと、咲は経理の仕事をしていた会社に行かなくなり、当たり前のことだが解雇された。それからというもの、食欲はなくなり、体が必要とする最小限の食事しか摂らなくなった。美味しいか不味いかは関係がない。味自体をそもそも感じられないのだ。ある日、下の階にあるリビングにあった父親の淳一のタバコを部屋に持ち帰って吸ってみた。はじめはむせたが、二本目、三本目と吸ううちに慣れてきて、いくぶん心が落ち着いた。暇を持て余すといった精神的余裕はなかったが、タバコを吸っているときは時間の流れを感じられた。

咲が会社をやめて部屋に閉じこもるようになったはじめのうち、両親は彼女に理由を聞こうとしたり、無理にでも外に出させようとしたが、いまは諦めたようだ。閉じこもってから何日かして部屋から出てきた咲の表情を見て、両親は彼女に何も言えなくなってしまった。生気の抜けた青白い顔から読み取れる情報は少なかったが、きっと付き合っている男性のことだと目星はつけていた。咲が閉じこもる直前に、彼女のバンブーバックの中でめっちゃめっちゃになった料理を見つけ、それを捨てたり弁当箱を洗ったりしたのは母親の恵美だったからだ。鼻歌を歌いながら食材の仕込みをしていた咲を思い出し、恵美は涙ぐんだ。恵美が手伝うと言っても、自分ひとりでやらないと意味がないと言っていた咲。恵美は我が子ながら咲がかわいそうだった。

淳一は28歳になった咲にしばしば結婚のことを聞いてしまったことを悔やんでいた。咲はいつも嫌そうに口を尖らせたが、笑顔で「もうちょっと待ってね」と淳一の話をかかわしていた。いま思い返せば強がりと言っていたわけではなく、咲自身、もう少しで結婚できると期待していたのだろう。待ってねとかわすときの笑顔は、幸せな予感を内に秘めていた。どういう理由で別れたのかは両親とも知らなかったが、咲の傷ついた心だけはひしひしと感じていたので、無理に何かをさせたりはせず、しばらくは自由にさせようとしていた。

携帯電話をカチカチと開いては閉じを、咲は繰り返していた。きっと二度と鳴ることはないであろう明からの着信やメールを思うと、咲の心は深く沈み込んでいった。メモリに残っている明からのメールを読んだところで、過去の言葉はいまに何の意味ももたらしてはくれない。生き生きとした言葉たちは、咲を突き刺す棘でしかなかった。愛という言葉はなんて薄っぺらで残酷な言葉なんだろう。文字になって出された言葉は、まるで煙のように空気中に消え入ってしまった。

咲はカーテンを開いて、南向きの窓を開け放った。空気の動きが少なくなっていた咲の部屋に久しぶりに風が入り込んできた。髪の毛をくすぐられながら外に視線を運ぶと、母親らしき女性が5歳くらいの男の子の手を引いて歩道を歩いているのが見えた。ゴールデンレトリバーといっしょにふたりの脇を通り過ぎる高校生くらいの少年の姿も目に入った。家の前を通っている駅までつづく一本道の坂道を眺めると、今日の終わりを告げる夕陽が見えた。咲は、本当は夕陽がキレイなんだろうなと思いながら、自分の生まれた街を灰色のフィルター越しに眺めていた。

近頃、咲は夕食だけは食べるようになっていたので、時間になってもリビングに下りて来ないので恵美は不審がった。淳一は、食欲がない日もあるだろうと恵美の心配を和らげようとしたが、彼女は夫の言葉には流されず、咲を呼びに階段をあがっていった。女性の勤が危険信号を告げている。

恵美が部屋をノックしても咲からの返事はなく、乾いた音だけが響いた。

「咲？ いる？」

恵美は控えめな声でもう一度呼んでみたが、相変わらず咲からの返事はない。恵美は静かに咲の部屋のドアを引いた。

開け放たれた窓から夜の冷たい風が入り込み、咲の髪の毛を揺らしていた。咲は深緑色のソファでうつむいていた。彼女が眠っているのだと思って、恵美は自分の勘違いに安堵しそうになったが、ソファの下フロリングに滴る液体を見て悲鳴を上げた。焦茶色のフロリングなので色がわかりにくいですが、液体は確かに咲の掌から流れ落ちていた。ジュースをこぼしているわけではない。

咲に近づいて彼女の左手を手にとってみると、手首に近い内側の部分がぱっくりと割れていた。熟した果実にフルーツナイフを入れたときに、中の果肉が外に解放される映像を彷彿とさせた。半狂乱になって咲を呼ぶ恵美の視界の隅に、最近はあまり使ってないフルーツナイフが赤く染まって転がっているのが見えた。淳一が部屋に来て恵美の頬を叩くまで、恵美は叫び続けていた。

「お母さん、私にも、血は赤く見えるんだね」

咲は病室のベッドの上で、左手の包帯を右手でさすり、言葉を続けた。

「私ね、世界の色がわからないんだ。いままで色鮮やかだったのに、いまはもう白か黒か灰色にしか見えないの。それでね、自分の血の色が赤く見えたとき、おかしいかもしれないけど、私、嬉しかった」

恵美が息を飲み込む音が聞こえた。

「お母さんは、咲が生きていたことが嬉しかったよ。何があったかとか、なんでこんなことをしたのかよりも、生きていて、本当によかった」

恵美の頬にひとすじの涙が流れた。咲は恵美の涙を見ながら、透明な色もあることを知って嬉しかった。

「私ね、フラれたの。彼ね、奥さんも子供もいた。そんなのにも気づかない私って、ホントにバ

かだよね」

咲は舌をちょこっとだけ出して微笑むと、横になって窓の外を向いた。恵美は娘の強がりも心の傷も痛いほど見えたので、そっとしていた。涙が咲に見えないように病室の入口の方に顔を向ける。

「それじゃあ、お母さん、そろそろ帰るね」

「お母さん、ありがとね」

咲は窓に体を向けたまま消えているような声で呟いた。恵美は目頭を押さえながら病室を出ていった。

## おばあちゃんの話

---

担当の伊藤先生の話によると、回復は良好で明日にでも退院はできるということだった。ただ伊藤先生は、体の回復だけではなく心の回復も必要だと考えていて、咲に心療内科の受診を勧めてきたが、彼女はそれについては拒み続けた。自分でがんばって回復したいと伝えたが、本当は心の中を誰かに見られることが怖かった。咲は母親と相談して、伊藤先生の言うとおりに、明日退院することに決めた。太陽は真上にさしかかっていた。

病院の食事はもともと味気ないのかもしれないが、味覚が麻痺している咲にとってはどちらも同じことだった。本当はしょっぱそうな焼魚を少し口に入れ、ご飯を二口だけ食べて咲は箸を置いた。

「咲ちゃん、心配させてえ。もっとご飯は食べんといかんよお」

ご飯をゆっくりと噛んでいた咲が病室の入口を見ると、横浜の祖母が杖をついて入ってくるころだった。心配した恵美が知らせたのだろう。祖母の民子がゆっくりとベッドに近づいてきたが、途中で杖をつかえて転びそうになった。

「おばあちゃん、気をつけて」

民子は後ろから押し出されるようにベッドの手すりをつかみ、なんとか転ばずにすんだ。そして咲の足元に腰掛けた。恵美の姿が見えない。看護婦と退院のことでも話しているのだろうか。

「おばあちゃん、久しぶりに会うのに、こんなところでゴメンね」

「なあに、ばあちゃんも病院は慣れてるし、気にせんよお」

90歳近くになり通院することが多くなった民子の言葉は、笑えない冗談のように咲には聞こえた。民子は咲が残した梅干を口にして目を細めた。

「咲ちゃんが暇だと思ってなあ、今日はばあちゃんの昔話でも聞かせてあげようかねえ。ずっとずっと昔のことだがねえ」

民子は遠い目をして語り始めた。

「あれは、遠い昭和のことだったあ」

町の弁当屋を営んでいた田辺洋二に私が出会ったのは、戦争が本格化する前だった。まだ日本は食糧難には陥ってはず、食材を豊富に使う弁当屋という商売が許された時代だった。

私はいつもはおにぎりをふたつ作って紡績工場に通っていたが、その日は昼食を作る時間がなかったので工場で評判だった弁当屋、つまり洋二の店に寄ってみたのだ。弁当屋とはいっても今と違っていろいろな種類の弁当があるわけではない。私は日の丸弁当を注文した。

「ほい、日の丸いっちょう！」

店主が厨房に威勢よく声をかけた。この店主が洋二だった。

「おねえちゃん、今日も暑いね。うちの弁当食ってがんばってくれよ！」

洋二はそう言うと、奥に向かって何かを話しかけた。私は元気な店主だなと思ったが、それだけだった。

「おねえちゃんが頑張れるように、オマケしといたぜ」

「どうもありがとうございます」

私は何をオマケしてもらったのかもわからないまま、お礼だけ言って店を出た。通りは人で溢れていた。この頃の東京はまだ道も整備されていなく、狭い往来を塊のようになって人が行き来していた。私は弁当を下げた袋を持って、人の流れに合わせるように工場に向かった。

「はじめて日の丸弁当買って見たよ」

昼時になり、私は光子と昼食を食べた。光子は工場で特に親しくしている同い年の子だ。工場の外に広い庭があり、芝生ではなく砂が敷かれていたが、私たちはいつも座ってご飯を食べた。

「結構うちの工場にもファンがいるみたいだね。節約してるから私は食べたことないけど」

「今日は朝時間がなくて、しょうがなく・・・ね」

弁当箱を開けると日の丸弁当ではなかった。

「あ、梅干がふたつ入ってるね」

光子が弁当を覗いてきた。私は洋二が言ったオマケの意味はこれか、と思い微笑む。白いご飯の真ん中にふたつ梅干があり、角にはたくあんが入っていた。いまでは質素すぎるかもしれないが、当時白米だけのおにぎりを食べていたことを思えば、梅干とたくあんでも、なかなか豪華な食事だった。

「光子、梅干ひとつあげる」

「本当？ 嬉しい」

光子は箸で梅干をつかむと、口に放り入れて唇を尖らせた。すっぱさと美味しさが入り混じった表情だ。

「しみるー」

光子はおにぎりを頬張り、梅干と白米の味を楽しんでいた。

「本当だ、しみるねえ」

私も弁当をついばんだ。午前中の仕事の疲れが癒される味だった。ただの白米と梅干だったが、贅沢に弁当を買ったせいか、いつものおにぎりよりも美味しく感じられる。たまには弁当を買おうかな、と私もファンになりそうな気持ちにひたりながら、光子と仰向けに寝そべて空を眺めた。雲ひとつない真青な空が、まさか数年後に爆撃機の暗雲になるとは、このときは微塵も考えていなかった。

翌日はおにぎりをふたつ作った。通勤途中に弁当屋を覗いてみると、洋二が昨日と同じように厨房に注文を叫んでいた。できたての弁当を袋に入れて客に渡すときに、ふと洋二と目が合った。恥ずかしくなった私は会釈をして立ち去ろうとしたが、

「ちょっと、昨日のおねえちゃん、待ちなよ」

と、洋二に引き止められた。いや、引き止められたというより、引き止めてもらえた、と言った方が感情的には正しい。

「今日は弁当買わないのかい？」

洋二は両手の親指と人差指でふたつの輪をつくって私の方に向けた。たぶん梅干ふたつの意味

なのだろう。

「昨日はオマケありがとうございました。すっぱいの食べたから午後の作業が助かりました」

洋二は相好を崩した。目の皺が彼の優しさを物語っていた。

「今日はおにぎりつくって来たんです。そのうちまた買わせてもらいますね」

「おう、ありがとね。ちょっと待ってな」

洋二はいつものように奥に声をかけ、小さな包みに梅干をふたつ入れ、私にくれた。私は両手で水をすくうようにそれをもらい、おにぎりの入った風呂敷に包みを入れた。

「ありがとうございます。これで今日も仕事がんばれます」

私が言うと、洋二は右手を握り親指を立てて送り出してくれた。風呂敷をいつもよりも高く振りながら、私は跳ねるような足取りで工場への道を歩いた。たぶん私はこのとき、洋二のことを好きになったのだと思う。

## ささやかな幸せの予感

---

郊外のピクニックに誘われたのは、三度目の弁当を買おうとした日だった。はじめて店に行ってから、週に一度のペースで弁当を買っていたので、洋二と会って二週間くらい経ってからのことだった。いつもと同じように日の丸弁当を注文すると、いつもどおり洋二が奥に声をかけた。今日も梅干をふたつ入れてくれるだろうか。

「おねえちゃん、今度さ、よかったら浅草にでも行かないかい？ 弁当持ってさ」

威勢の良い「いってらっしゃい」の言葉を期待していた私は拍子抜けしたが、すぐに真顔になって洋二を見返した。気前の良さそうな顔が取り柄の洋二が真顔になっている。18歳だった私にとって、男性から誘われるのは初めてのことだった。呆然として洋二の目を見つめていたことに気づいた私は、急に恥ずかしくなって目を逸らした。きっと顔は紅潮しているのだろう、火照りを感じる。

「楽しみにしています」

私は棒読みのような話し方をしてしまったが声は上ずって、洋二にはさぞや滑稽に聞こえただろう。顔の温度がさらに上昇していった。

「ホントに？ やった！」

熱い耳に涼風を送ってくれる洋二の声。恥ずかしくてどこかに隠れたい私を救ってくれた。俯いたまま目だけ上げると、いつもとは違う洋二の笑顔があった。

次の日曜日にこの店の前で待ち合わせてから浅草に行くことになった。この日、私は緊張と嬉しさとで仕事に集中できなくて会社に迷惑をかけてしまったかもしれない。ただ弁当箱に入った二粒の梅干を食べて、午後は午前中の失敗を取り戻せたはずだ。

雷門から入った仲見世通りは人でごった返していた。左右に並ぶ露天ではお菓子や小物が売られていて、求める人ばかりで賑やかだ。太陽がまぶしく輝き、行き交う人々に自然の恵みを降り注いで活気づけている。

洋二は紺の甚平に下駄を履いていた。下町風の格好が浅草に映えている。私は母親から借りた青の着物を着てきた。洋二の紺と私の青が揃ってしまい恥ずかしかったが、その倍くらい嬉しくて足が軽やかで、洋二にぶつかりそうになってしまう。

「民ちゃん、着物が似合うねえ。浅草にぴったりだ」

「洋二さんこそ、このへんの大将に見えますよ」

「もともと下町育ちだから、これが普段着さ」

私は洋二の少し後ろを歩きながら、そんな彼の言葉を楽しんだ。カランカランと鳴る下駄の音が心地良い。

仲見世通りの人だかりをやっとのことで抜けて、私たちは浅草寺を見上げた。洋二の横顔を見やると、洋二もこちらを見て、にっこりと微笑んだ。この人の笑顔はいつも素敵だった。

細かい石が地面を覆う境内から石が少ないところを探して、洋二は莫蔭を敷いた。ふたりがやっとのことで座れる一畳くらいの莫蔭を洋二は用意していた。草の香りが清々しくて、私は香る

空気を大きく吸い込んだ。

「民ちゃん、今日は日の丸じゃないぜ」

洋二が風呂敷から黒塗の弁当箱を出して蓋を開けると、卵焼き、唐揚げ、昆布巻、焼き鮭など、まるで正月のお節並の料理で埋め尽くされていた。重箱の二段目にはお稲荷が詰められていて、あまりのご馳走に私は歓声を上げた。そして気づいた。お稲荷の隅に入れてある、ふたつの梅干に。ロマンの欠片もないけれど、梅干にはふたりの絆が感じられる。そう、私と洋二は、日の丸弁当で出会ったのだ。

「店の料理人に頼んで作ってもらったのさ。ちゃんと金は払ったんだぜ」

洋二はお稲荷をひとくちで頬張りながら、弁当自慢を始めた。潔い食いっぷりに思わず頬が緩む。

「この昆布、すごく美味しい。こんなの食べたのは本当に久しぶり」

ふだんから家計を節約していた私は、本心からそう思った。いつもはおにぎりや味噌汁くらいのものであった。弁当屋の経営者とはいえ、洋二だって奮発したに違いない。自分の店の弁当なのに「うまい！」を連発している。

鮭は丁寧に切身にされていて、あっさりとした塩味で優しく焼かれていた。弁当屋の厨房にいる、無愛想な料理人のプロの仕事が伝わってきた。私は骨のほとんど残っていない切身を箸で小さく分けて、お稲荷といっしょに口に運んだ。鮭のしょっぱさとお稲荷の甘さのバランスが美味しくて、何十回も噛んでしまう。

「あの板さんはね、ほんと無愛想なんだけど、腕だけは確かなんだぜ。今日だって民ちゃんと浅草行行って言ったのに、にこりともせず作ってたな。でもこの味出されちゃ、頭が下がるさ」

「本当に。梅干も板さんが作ってるんですか？」

「そうだよ。あの梅干うまいっしょ？ 日の丸は人気メニューだ。儲け少ないのが玉に瑕だけだね」

そう言って洋二は大声で笑った。ガハハハと笑う人を初めて見た気がした。つられて私も声を出して笑ってしまった。

最後に私たちは梅干を頬張って、その甘さやしょっぱさを噛み締めた。弁当箱の中に並んで転がっているふたつの種と同じように私たちも並んで、もう一度浅草寺を見上げた。木漏れ日のような光が屋根の向こうから私たちに降り注いでいた。

洋二に出会ってから一年くらいたったとき、洋二からプロポーズされた。当時は恋愛結婚はそんなに多くなかったから、結婚までに一年くらいかかるのは珍しい方だった。

洋二が私の両親に挨拶しに来たとき、会うやいなや玄関の土間に頭をつけて、  
「咲さんを僕にください！」

と叫んだので両親も私も驚いてしまったが、両親を傍目に、私はクスクスとしてしまった。これでは両親も悩んだり断ったりする余裕もすっかり消沈したに違いない。ただ、土間から見上げる洋二の表情はいつになく真剣で、男らしいものだった。実家が横浜だった私たちには、これが東京下町の男なのだと、新鮮な潔さが伝わってきた。

「洋二さん、顔を上げてください。着物も汚れてしまいますよ」

父も玄関に膝をつき、洋二の肩を叩く。父の顔には苦笑いがあった。何も言えなそうだ。

洋二は土間に置いた黒模様の立派な風呂敷を父に向けながら、

「これ、うちの弁当屋の料理です。気合いを入れて考えましたので、是非みなさんで食べてください」

父の肩越しに風呂敷を見ると、三段くらいの大きな弁当箱なのか、風呂敷が正方形に膨らんでいた。今日もきっと板さんに無理難題を突きつけて調理してもらったに違いない。あの板さんも、洋二の注文のおかげで、いろんな料理に挑戦できているのだろうと、私は見当違いのことを考えていた。

母が食卓に弁当箱を広げ、私は日本茶を淹れた。弁当箱を広げたとき、私は心の中で歓声をあげた。お正月とお盆が一度にやってきた以上の豪華さだ。

「民子、男性の前でそんな声を出すもんじゃない」

父にそう言われても何のことか分からなかったが、母がこちらを見て口に人差し指を当てていたので、私の歓声は心の中ではなく、外に出ていたのだと気づいた。すぐに顔が熱くなっていった。

「洋二さん、こんな豪華なお料理をありがとう。立派なお店を経営されてるんですね」

父はそう言って、お茶を口に運んだ。

「こんなに豪華なお料理を食べてしまったら、いつものご飯では満足できない贅沢病になってしまいそうだわ」

母も言葉とは裏腹な表情で料理を眺めている。何の話もなく、いつの間にか事が進んでいるが、結婚は承諾されたのだろうか。

「この角にある橙色の麺は何て料理なんですか？」

さすが毎日の食事を任されている母だけあって、料理への興味が強い。

「お母さん、それはナポリタンっていう料理なんだって。スパゲティっていう麺にトマトの汁を絡めて作るんだよ」

私は洋二の受け売りを母に伝えた。

「うちの料理人が勉強熱心な男で、洋食にも詳しいんです。前に民子さんに食べてもらったときに褒めてもらえたので、今日も作ってきたんです。お母様も是非どうぞ」

母がナポリタンに箸をのばす。手元の小皿に取り、そして口に運んだ。大げさに言えば、目を見開いた。うちの家系はどうやらナポリタンが大好きなようだ。私も母と同じように小皿に取って、ナポリタンを味わった。酸味と甘みが心地良い。無愛想な板さんに、心の中でありがとうを言う。今度は声に出さないように気をつけた。

母と私はナポリタン修行に励むことになった。板さんからレシピを教わった洋二が私に教えてくれて、私から母にそれを伝えた。当時、スパゲティはなかなか入手できなかったもので、洋二の店を経由して仕入れることにした。高級食材だったので頻繁に食べることはできなかったが、月

に一回くらいはナポリタンで食卓を賑わすようになっていた。やはりうちの家系はハイカラなナポリタンが好きなんだ。

咲がクスクスと笑っているのを見て、民子は少し安心した心持ちになった。まだ昔話は途中だったが、真剣に聞いていた咲にとって、堪えられないエピソードだったのだ。

「私もお母さんからナポリタンの作り方習ったんだよ。なんでナポリタン？ って思ったけど、代々語り継がれたレシピだったんだね。確かにうちの家系はみんな好きだもんね」

咲はオレンジ色とあの酸味を思い出した。病院の食事には出たことがない。最後にナポリタンを見たのはいつだっけ？ 思い出そうとして咲は俯いた。

「そっか、公園でこぼしたのが、最後のナポリタンか」

オレンジ色に汚れた指先を思い出し、咲の心は重くなった。鮮やかなはずの橙色が色褪せていく。瞳から久しぶりに涙が落ちていった。できれば思い出したくなかった。でも、祖母は何も悪くない。

「咲ちゃん、泣いてもいいんだよ。でも、ばあちゃんの話、最後まで聞いてちょうだいね」

涙で布団を濡らしながら、咲は何度か顔を縦に降った。祖母の話から逃げてはいけない。自分自身からも、ナポリタンの嫌な思い出からも、逃げてはいけないのだ。何とか口を開いた。

「それでおばあちゃん、洋二さんとはどうなったの？ うちのおじいちゃんは洋平だから、違う人だよな？」

民子は遠い目をして病室の窓の外を眺めていた。民子の瞳も濡れているように咲には感じた。きっと祖母もあまりしたくない話なのだろう。私のために辛い過去を思い出しているのだ。苦しいのは、私だけじゃないんだ。咲は涙を手の甲で拭った。

「戦局が悪化してね、戦争が、うちにも襲ってきたんだよ」

戦争なんて、軍人さんがするものだと思っていた。パン屋さんがパンを焼くように、着物屋さんが着物を織るように、弁当屋さんが弁当を作るように。弁当屋さんの洋二が戦争に行っても何もできないという思いは、東京の雲ひとつない遠い青空に吸い込まれていき、やがて赤い葉書となって私たちの家に届いた。

「食材の納品書みたいだな」

洋二のひとつことは笑えない冗談で、時間だけが静かに止まっていた。納品書は赤くなんてないじゃないか。私は座ることもできずに、洋二の右手にあるひとひらの紙に少しずつ焦点を合わせた。

臨時招集令状。赤紙。戦争への切符。ただの紙切れが赤くなっただけで、いとも簡単に人を戦地へ向かわせる。

洋二と私は黙ったまま、赤い紙切れ越しに見つめ合っていた。モノクロ写真の中にポツンと映える赤色は、荒れ狂う大海原をひとりさまよう小船のように、行き場のない孤独感を私に与えた。

私は洋二の右手から赤紙を奪い取って、真ん中から半分に破った。ビリッと乾いた音が虚しく響いた。何度破っても、紙はなくならないだろう。頭ではわかっている、私はさらに半分に破り続けた。

舞台上で使う粉吹雪のように、細切れになった赤い紙が私たちの足元に降り注がれた。

洋二の見送りは、思っていたよりも淡々と流れていった。軍服に着替えた洋二はまったく似合っていないで滑稽だったが、まったく笑えなかった。はじめて洋二と浅草に行ったときの、彼の甚平姿が私の胸を締めつける。洋二は下町育ちの生粋の江戸っ子だ。戦争をするための能力なんてあるわけがない。私は声を大にして誰かに懇願したかったが、洋二の言葉に遮られた。

「民子、俺のいない間、店よろしくな」

そうして、この日初めての笑顔を私に見せてくれた。私は洋二に風呂敷を手渡した。店のではない、私が作ったおにぎりが入っている。

「板さんには遠く及ばないけど、道中、おなかがすいたら食べてください」

自分の言葉に驚いた。洋二に行って欲しくないのに、私は洋二が行くことを、避けられない運命として受け止めていたのだ。

「おにぎりは、民子の勝ちだ。いろんなものが詰まってる」

私は上目づかいで洋二を見上げた。似合わない軍服の上に、似合わない帽子を除けばいつもの洋二の男らしい顔があった。逆光が射し込んだ白い表情は清々しかったが、同時に死と隣り合わせの匂いがした。

そして私と洋二の感情とは無関係に、ふたりを断ち切るような残酷さで汽車は動き出す。ゆっくりとだが、確実にふたりを離れ離れにしていく。

私は小走りしながら、離れていく洋二を追っていく。洋二は汽車のデッキから上半身を出して

私を見つめていた。

「洋二さん、帰ってきて！ 絶対に帰ってきて！」

洋二は親指を立てた手を私に向けた。

「民子、またいっしょに浅草行こうな！ ナポリタン食おうな！」

汽車の動きが早くなっていく。このままずっと追っていけば洋二といっしょにいられるという私の安易な考えは、汽車のガタゴトという音にかき消された。洋二の手が硬貨くらいの大きになり、やがて点になり、そして見えなくなった。洋二と私は、時代の容赦ない力によってあっけなく引き離された。私はプラットフォームに膝を付いて汽車が向かった先を見たが、そこには空白しかなかった。洋二が私の前からいなくなった。

「残酷すぎるよ」

咲は瞳にたまった涙を手の甲で拭い、白い掛布団に視線を落とした。話しながら悲しげな表情になっていく祖母を直視できなかった。

「生まれた時代が悪かったなんていう言葉は何の意味もなかった。昭和でも、平成でも、人の気持ちは変わらん」

民子の言葉を聞いて、咲は無言で何度もうなづいた。揺らされた顔から、幾粒かの涙が落とされた。咲は人の別れにはいろいろあって、小さなこと、理不尽なこと、そんなことに人の一生が振り回されることが悲しくて、祖母の胸中を思うと心が痛かった。

咲は想像してみる。強大な力によって、男女の意思とは無関係に引き裂かれることを。心にぽっかりと穴ができるというよりも、心に重い塊を埋められる感じがした。その想いはなくなり、一生引きずっていきそうな気がした。

「おばあちゃん、つづきを聞かせて」

民子は目を細めた。

## 奪われ、そして失われた

---

洋二がいなくなったとはいえ、生きるためには弁当屋を仕切っていくしかなかった。洋二と結婚してからは、私も弁当屋で働くようになっていたし、洋二がしている勘定関係の仕事も教えていたから、店の経営が傾くこともなく、いままでどおりの生活ができていた。ただ、洋二のいない家に帰ると切なさがこみ上げてきて耐えられなくなり、横浜の実家に戻っていた。

洋二よりも年配だった板さんは招集されていなかった。私はそんな彼を洋二と比べて憎むこともなかったし、むしろ弁当屋の経営に必要な彼が戦争に行かなくて良かったと感謝していた。

店は相変わらず繁盛していて、仕事をしている大部分の時間は洋二のことを思い出さずに済んでいたが、日の丸弁当の注文だけは、私に彼を思い出させた。

耳をすませば聞こえてくる「日の丸いっちょう！」という洋二の威勢のいい声は、幻聴だとはわかっていても嬉しかった。でも、日の丸弁当を受け取ったお客が店を出るときには、喜びも色褪せて切なさだけが残った。洋二の記憶が店のあちらこちらに刻まれていた。

「民子さん、お客さん、来てるぜ」

突然板さんに声をかけられて私は我に返った。すっかり意識が遠い記憶をさまよっていたようだ。

「すみません。いらっしゃいませ。何になされますか？」

待たせてしまったお客に、つい作り笑いをしてしまう。過去と今との間の折り合いがつかないまま、私は無理をしている。

「あの、洋二さんの知り合いなんです、結婚したと聞いて、一度お店に来てみようと思いました」

見知らぬ青年はまじめな顔をしたままそう言った。洋二からは何も聞いたことがなかったので、

「そうですか。夫は戦争に招集されて留守なんです」

と、世間話のような言葉を発していた。軽い言葉が時間差をおいて、場の空気を重くした。

「そうでしたか。それでは、お店の方も大変でしょう？」

青年は心から気の毒そうな顔をしたが、どこかあどけなさの残る表情に、私は苦笑いせざるをえなかった。

「オススメのお弁当はありますか？」

青年は店内の壁に貼られているお品書きに目を向けた。いちばん安い日の丸弁当が右端に書かれ、左にいくほど高い弁当が書かれている。

「ナポリタン」

無意識のうちに私はそうつぶやいていた。洋二がいなくなってから、ナポリタンのことなどすっかり忘れていたし、いつのまにか料理することもなくなっていた。何かに背中を押されるように、ぽっと出たひとことだった。

「ナポリタン？　じゃあ、それにします」

ナポリタンはもちろんお品書きにはない特別メニューだ。私は板さんにナポリタンを作ってく

れるようにお願いした。無表情の板さんからは何も読めない。定番ではないから手間で嫌なのか、自信のある料理で意気込んでいるのか、どちらでもないのか。さっぱりわからないが、パスタの麺を棚から取りはじめていたので、作ってくれるようだ。

青年はカウンター越しにいるままだ。目のやりどころがないのか、厨房を覗いたり、お品書きを見たり、天井や床を見たり、落ち着きがなかった。

「あの、夫とはどういった関係の方なのですか？」

私は青年の手持ち無沙汰に救いの手を投げてみた。実際にどういう知り合いなのか気になっていた。

「小さい頃からの近所仲間なんです。洋二さんは僕よりもふたつ年上で、よくかわいがってくれたんです」

青年は子供時代に思いを馳せるように目を細めた。

「僕は早瀬洋平っていいます。」

私はできあがったばかりのナポリタンを袋に包みながら、無意識のうちに早瀬洋平というその名前を心に刻んでいた。

洋二からの連絡がないまま、時だけが過ぎていった。やがて戦局が悪化し、洋二との思い出の場所、この弁当屋が終わりを告げる日が訪れた。

お客とは明らかに違う不穏な空気を感じさせる男性が店に入ってきた。

「御国のために、この店にある食材、器具などを献上してください」

男はまだ若そうだったが、顔色ひとつ変えることなく私に言い放った。厨房の奥から、板さんが舌打ちする音が聞こえてきた。入口に立ったままの若者は、板さんの舌打ちが聞こえたのか聞こえないのか、なお顔色は変わらなかった。若者は憲兵だった。

「そんな。私たちはこの弁当屋を営んで食べているんです。商売道具を取られたら、明日からどうやって食べていけばいいんですか？」

若い憲兵の顔色は変わらなかったが、少しだけ俯いて、

「御国のためです」

と頑とした声を出した。彼の後ろから数名の憲兵隊が店に入ってきて、なりふりかまわず厨房に押し寄せた。板さんが包丁を持ったままなのが心配だったが、その悪い予感は大当たってしまった。厨房への入口で憲兵隊が止まっている。彼らの先には包丁をこちらに向けた板さんがいた。

「ここは洋二と民子さんの店だ。お前らに荒らされる筋合いはない！」

背の高い憲兵がすぐさま警棒をつかむと、板さんの頭を殴りつけた。ゴンという鈍い音が店内に響き、板さんが倒れた。板さんに巻き込まれたボウルやざるなどが床に落ちる甲高い音が続いた。

「板さん！」

私は厨房に駆け寄ろうとしたが、警棒の憲兵とは別の憲兵に掴まえられて、板さんに近づけなかった。憲兵隊の間から見えた板さんの頭から赤いものが流れていた。

憲兵隊のうちのひとりが板さんに手錠をはめ、どこかに連行していった。他の憲兵隊は無駄のない手際の良さで、店の中にある食材と金属製の器具を運び出し、リヤカーの荷台に載せて行ってしまった。抜け殻の店、抜け殻の心。私の涙は頬を伝うことなく、直接地面に落ちていった。すべて奪われた。

「民子、泣くな！」

地面から顔を上げると、輝く太陽を背にした洋二がいた。

「俺がいるから、泣くな！」

「洋二さん！」

私は洋二に駆け寄り、彼の胸に顔をうずめて子供のように泣きじゃくった。みるみるうちに洋二の服が涙を吸い込んで濡れていったが、かまわず私は泣き続けた。

どれくらいそうしていたのだろう。太陽が赤々と西の空に沈みかけていた。涙で陽炎のようにぼやけたオレンジ色の太陽は、洋二そのものだった。

「民子さん……」

確かに洋二はここにいた。彼の匂いも、私の知っている彼の匂いだった。でもそこにいたのは、早瀬洋平だった。すべて失われた。

昭和20年8月15日に私は洋平といっしょに玉音放送を聞いていた。まわりには泣き崩れる兵隊さんや、目頭を押さえる人々の姿があったが、私には何の感情も起きなかった。洋二が失われた悲しみだけがあり、それは戦争のせいではあるけれど、戦争や敗戦に恨みも悔しさもなかった。

数ヶ月前、洋二の遺品が届けられたとき、私は前もってわかっていたことなので驚きはしなかったが、遺品に刻まれた洋二の生きた証は私の心を揺さぶった。出征時に渡した手作りのハンカチが赤く汚れているのは洋二の血だろう。決して血を拭くために渡したわけじゃない。でも、ハンカチで血を拭かなければならない状態が洋二を襲ったのは確かなのだ。弁当屋の店頭で大きなかけ声をあげていた洋二と、戦地で流れ出た血を拭く洋二に何の関係性も見つけられず、血を拭く洋二を想像するだけで、なぜかおかしくて笑ってしまった。あの下町の大将のような洋二が、切られたのか撃たれたのか、流血をしているシーンは滑稽だった。それでも、想像の中の洋二の顔は痛みに歪み、きつくハンカチを縛って止血しようとしていた。その真剣さが、私から笑いを奪い、苦しみを植えた。

私と洋平は谷中の道を歩き続けた。会話もなく、まわりの音も聞こえないから、私には真の静寂に感じられた。

「あの日、洋平さんが洋二さんに見えたんです。あのまま弁解もせずにそのままにされていて、すみませんでした」

私の歩調は遅くなった。洋平も私のペースに合わせてくれた。

「それは、なんとなく、わかっていました。民子さんの目は、愛する人を見つめる目でした。生意気言ってすみません」

洋平は右手を後頭部に当てて、ぺこりと頭を下げた。

「でも、民子さんが見たのは、きっと洋二さんだったんだと思います。僕自身、あのときの記憶がすっぱり抜けてるんです。気づいたら民子さんが僕のところで泣いていたというか・・・」

そう言うと、洋平は再び頭を下げた。

「洋平さん、本当は洋二さんの何なんですか？」

洋平の表情に一瞬陰がさした。できれば避けたい質問だったようだ。

「本当に近所の先輩なんです。面倒見の良い・・・」

私は洋平の目を見つめる。私は視線を外さず、黙ったまま見続ける。洋平は視線に耐えられなくなったのか、観念した顔をした。

「俺が戦争に行ったら民子のことを頼むって、洋二さんから言われました。ガキの頃から知ってるお前なら安心して任せられる、とも」

私の沈黙は続いた。洋平から話を聞きだすための沈黙ではない。戸惑いを隠せなかった。洋平が続ける。

「もちろん気持ちあつてのものですし、僕は洋二さんにはなれない。僕自身も洋二さんのお願いに戸惑いましたけど、民子さんが働くところや、たまに見せる悲しげな顔を見ていると、ほんと

けないと思うようになりました。はっきり言ってしまえば、守ってあげたいって」

さきほどまでペコペコと頭を下げていた洋平がいつの間にか真剣な眼差しになっているのを見て、私も我に返った。

「そんな、男だけで勝手に・・・」

私の脳裏に、洋二、洋二がのりうつった洋平、そしていま目の前にいる洋平が、浮かんでは消えていった。まるで古いアルバムをめくっていくように。たった数年前のことなのに、私の中の映像は懐かしさを運んでくる。一枚一枚の写真に涙を吸い込ませながら、私の記憶が揺らめく。

ふと空を見上げる。澄みきった青色の中に、ほんやりと淡く、だが確かに洋二の姿があった。あのときと同じ甚平を羽織り、下駄の音がここまで聞こえてきそうだ。

「洋二さん」

洋平が隣でつぶやいた。私と同じ場所を見上げていた。

「民子さんは、僕が守ります」

空の中に、洋二の笑顔が映えていた。はじめて会ったときに私に見せてくれたのと同じ笑顔。私は洋二のこの笑顔に恋をしたのだ。私は膝をついた。大粒の涙が止まらなかった。洋二は困ったような顔をしたが、やがて私たちに背中を向け、空の向こうに歩いていった。見えなくなるまで、洋二は手をあげていた。洋二は空に帰ったのだ。

「これが、おばあちゃんから教えてもらった、おばあちゃんの恋のお話」

嗚咽で声を詰まらせながらも、咲はひとことずつ、民子に語り聞かせる。

「おじいちゃんが亡くなって、すっかり元気をなくしたおばあちゃん。入院している病院にお見舞いに行っても、もう私のことをわかってくれなかったよね。でも、私は何度も何度もこのお話をおばあちゃんに聞かせたんだよ」

弔辞の台本に涙が落ち、半透明に文字が滲んでいる。額の中の民子の顔も、咲にはもうぼやけて見えなかった。

「私が生きることに疲れてしまったときに、元気をくれたこのお話で、おばあちゃんにも元気になって欲しかった。でも無理を言うのはやめることにしました」

咲はハンカチで涙を拭って、民子の写真を見上げた。元気だったころの民子が笑っている。咲も民子に負けないくらいの笑顔をつくった。

「だって、空の向こうには、おじいちゃんと、洋二おじいちゃんがいるもんね！」

咲は上を見上げた。斎場の白い天井があったが、咲にはその向こうが見えていた。

「おばあちゃん、私にも空は青くてキレイだよ！」

## おばあちゃんとソラの話

<http://p.booklog.jp/book/56829>

著者：橋本コウ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/koohashimoto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56829>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56829>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ